

研究ノート

農民の人生経験に基づく選択

― カハマルカ県山村における生乳及び乳製品販売形態の違いを事例に

古川勇気 YUKI FURUKAWA

山梨大学 THE UNIVERSITY OF YAMANASHI

I はじめに

南米ペルー共和国(以下、ペルー)の北部山地に位置するカハマルカ県(Departamento de Cajamarca)は国内有数の酪農地帯である。同県の農民は自家消費のための農業を基調としながら、乳牛を中心とした家畜の飼育をおこなっている。チャンタ・アルタ村(Chanta Alta)では、週末にチーズを売買する定期市が立つため、農民は各家庭で生チーズを作り販売している。また同村には専門的にチーズを生産する農民もおり、彼らに毎朝生乳を販売する農民がいる。このような農民たちの間での、生チーズを売るか、生乳を売るか、あるいは専門的にチーズを生産販売するのかという選択の違いは、どのような要因から生まれるのか。本稿は、この単純な疑問を起点に彼らの選択プロセスを民族誌的に論じることを目的とする。

農民は思いっくままに選択をおこなうのではなく、様々な経験を基に適当なものを選び取っている。そのような彼らの経験には、今日では都市の影響が大きな比重を占めている。近年の出稼ぎ経験や教育経験、農村開発といったように、今日どのように辺鄙な農村であっても市場経済の影響がみられる。そのため本稿は、市場経済を通じてもたらされる都市の影響を、農民がどのように自らの経験として認識し、日常の営為の中に取り込んでいるのかを考察する。また都市の影響の中で明らかになる、彼らの子供の将来に対する配慮についても検討する。そして最後に、市場経済の影響によって複雑化するカハマルカ県山村の社会状況の一端を整理する。

II 農民の流動的営為を捉える視点

II-1 アンデス農民研究

まず、アンデスにおける農村と市場経済に関する先行研究とそこから生じる問題を検討する。

19世紀後半からアンデス山村では、隣接する海岸都市のサトウキビ産業と綿花産業や、中央・南部高地でのヒツジやアルパカの毛織物産業など、外国資本が持ち込むモノカルチャー産業の影響によって、村内に市場経済の影響がみられた。1980年代までのアンデス農村を考えると、経済的には「閉じて」いなかったといえる⁽¹⁾ [cf. Mayer 1974; Orlove 1977; 友枝 1986; Deere 1990; Mitchell 1991]。

例えば、アンデス南部高地の毛織物市場に関する民族誌的研究によると、19世紀後半からシクワニで拡大した毛織物産業は、イギリス商人などの買い付けによる世界市場の影響がみられるものであった。1900年から1970年代までのその産業の発展過程において、当初力を持っていたアシエンダが衰退し、政府の保証を受けた銀行などが商人や農民、牧畜民に対して力を持つようになり、鉄

道や商業の拡大によって、ますますその産業は発展していった [Orlove 1977 : 190-204]。当時、外国資本がもたらした貨幣を介した取引は、農民をはじめとする地方の人々にとっては都市部からの大きな市場経済のインパクトであった。そのインパクトに対して、地方のアシエンダや商人、牧畜民などが、それぞれ活動的に対応していった [Orlove 1977 : 204]。オーラヴの民族誌では、大規模な都市商人の戦略から土地を持たないものの工芸品生産への従事など、幅広い行為者が登場しており、それぞれの経済活動パターンの多様性がうかがえる。しかし、本稿の議論との関連で言えば、各社会階級や職業の人々が類型化され、一枚岩的に描かれているため、牧畜民や農民の個々の選択に関する記述は詳細さに欠ける。

アンデス南部高地の都市近郊農村に関するミッチェルの民族誌は、1960年代から20年近くにおわたる調査に基づき、当地の社会変化を描いている。既に1966年時点で、土地を持たない農民たちが、旅行客への物売りやトラック業、農業での賃金労働、製陶業での生産など、非農業の貨幣経済に参加するようになっていた [Mitchell 1991 : 102-131]。彼らは、教育のために自分の子供たちを村外へと出すようになり、その結果、村でのカルゴシステム⁽²⁾のような伝統的な宗教組織は担い手を失い弱体化したという [Mitchell 1991 : 163-176]。この研究で指摘されている農民の貨幣経済への参入という経済的变化は見逃せない。それは、1960年代には市場経済の影響が農村社会や農民の生活に変化をもたらすほど具体的な事象として表れていたことを意味している。ミッチェルは、市場の浸透の具体的な現れとして、農業以外の経済活動でいくら稼いで、祭りのためにいくら消費したのかといった点について、数値データと個別の選択に関する詳細な記述を加えている。

さらに、アンデス南部高地を調査した友枝の民族誌では、牧畜民の家畜の繁殖儀礼などの宗教的な実践が主題的に描かれているが、記述の細部には、牧畜民と農民との物々交換において想定されるレートなどへの言及もみられる。友枝は、牧畜民と農民の物々交換を貨幣経済のレートに当てはめるのは不適切かもしれないとしながらも、牧畜民や農民はすっかり市場や貨幣経済には馴染んでいる、と指摘している [友枝 1986 : 29]。この指摘からも、彼らの日常的な生活や交換活動が、当時から市場経済と深く関わっていたことが理解できる。

以上のような研究は、農民の市場経済との関わりに触れている貴重なものである。上記の研究からは、農民が市場経済に参入するようになった、または市場経済に巻き込まれるようになった状況がうかがえる。そうした農民と市場経済との関わり方についての先行研究において、農民は生活を補填する程度以上には市場に参入しないという指摘であっても、農民の市場経済との関わりに触れている貴重なものである。こうした一般的なアンデスの人類学的研究に対しては、たとえば次のような批判がある。経済学者のエフライン・フランコ [Franco 1974] の先駆的な業績等を除けば、概ね1980年代までの民族誌的研究には、アンデス村落を閉鎖的で非貨幣経済による自給自足システムに基づく共同体として描き出す傾向があった。その結果、市場浸透の影響が論じられたが、市場はあくまでも農村の生産パターンに影響を及ぼす余剰変数 (extraneous variable) としてしか扱われなかった [Mayer and Glave 1999 : 347]。確かに、上記の民族誌的研究は、農村内での生活に貨幣が必要になってきたという社会変化が明らかにされているという点で、当時としては画期的であったと評価できる。しかしながら、これらの研究においても村外の市場経済はあくまで農民の生産パターンに影響を及ぼす要因としてのみ扱われるという限界があった。農民が市場経済を理解しそこに参入しているのであれば、彼らなりの広い意味で損得計算と言い得るようなある種の計算があったと想定せざるを得ないが、ここまで見た研究では、そうした計算は主題化されていない。確かに、村で一部の豊かな農民が祭りの利益を得ていることは示唆されているが、それでは、大半の一般的な農民や牧畜民はいわゆる「金儲け」をしないのかという疑問は、当然生じるものであろう。むしろ、上記の研究からは市場経済の影響でどんなに農村内の状況が変化しようとも、農民たちは村での社会生活を基調として、市場経済と消極的に関わっているという印象を受ける。当時の研究におけるこうした記述の方向性が、どの程度当時の理論的方向性に規定され、どの程度実際の民族誌的状況

を反映するものであったのかについては、別途慎重な検討が求められる。

他方、1980年代以降の状況として、新自由主義の影響から、アンデス山村ではますます市場経済の影響が顕著になり、農民たちはより流動的な活動をおこなうようになってきた。そのような社会変化を背景に、上記の1980年代までの民族誌的研究に対する批判の一種として、経済人類学者のローズベリーの次のような指摘もある。1980年代以降、アンデス各地の農村へ市場経済が浸透し、農民が出稼ぎや賃金労働に高く依存する結果として村外・国外への越境が頻繁になり、都市と農村間の人々の移動がますます活発になっている[Roseberry 1989: 122-126]。このような農民の生活が流動的になってきている状況をどう捉えるかが、本稿の課題である。

II-2 農民の計算

新自由主義の影響が顕著にみられるようになった1990年代以降のアンデス人類学の農民研究には、市場経済の影響と農民の営為との関係性を扱う研究がいくつかみられる。それらの研究の中では、1980年代までのアンデス農民研究では前景化していなかった農民の経済実践が議論されている。ここでは、そのことを概観したうえで、本稿で農民の計算実践を議論する際に、どのような視点から考えるかを示す。

先述したように農民の営為がますます流動化していく事態を受けて、研究単位は農村共同体よりも微視的な農民世帯に移っていった[cf. Platt 1982; Harris 1982; Bradby 1982]。その中で、コロンビアの農村を調査したグードマンとリベラは、農民との長時間に及ぶ対話から「家モデル(house model)」を提唱した。そのモデルでは、農民世帯の基盤である家や畑、家畜さらには農村内で共有される資源や知識を維持・拡大しようとする諸活動を世帯経済とし、その経済の外側に置かれる市場経済の領域との関係性が明らかにされた。そして彼らは、農民は世帯経済の領域において節約の経営をおこない世帯の維持・拡大を目指す一方、世帯経済の外には市場経済の領域が存在し、その領域では主に投資による利益追求が目指されており、あくまでも両領域は異なるものだとしている[Gudeman and Rivera 1990: 2]。

ペルーの中央アンデスを調査したマイヤーとグレイブは、グードマンらのモデルを踏まえて、農民は利益追求のために「計算」をするが、それが会計監査で用いる計算とは異なっているという。その違いは、会計監査では世帯労働の量を含めて投入と成果の全体的なバランスから生産を計算するが、農民は生産コストと利益というお金の流れのみに着目してしか労働力の投入を計算していないという点にある[Mayer and Glave 1999: 344-355]。こうした研究のように、農民の経済活動を彼らの計算実践から捉えるという方法を用いたことの意義は大きい。農民たちは実際に都市に行くにしろそうでないにしろ、販売先の事情を見越して生産をしている。そのため、彼らの計算方法を考えることで、彼らの都市との関わり方が分析でき、ひいては流動的に見える彼らの生活の実態が理解できるのである。

その後のアンデス人類学では、市場経済と農民の営為の関係性に関する研究は低調になっていく。その中でも、例えば、ジャガイモの生産における品種の選択を扱った研究[Arias 2005]、グローバル市場の影響によるキヌアの生産拡大と伝統的な労働交換との関係を扱った研究[Walsh-Dillely 2013]、経済学的視点から農民は労働コストをかけすぎていると論じた研究[Antrosio and Colloredo-Mansfeld 2014]などがある。農民の経済実践を扱う研究が低調になった理由として、近年のアンデス農村では別の見過ごせない問題が生じており、そちらのほうに注目を集めているからともいえる。その見過ごせない問題とは、気候変動による問題[Eakin 2005; Espinosa 2009; Feola 2017]、水の利権をめぐる問題[Gelles 2000; Boelens and Zwarteveen 2005; Vera and Zwarteveen 2008; Boelens and Vos 2012; Stensrud 2016]、鉱山開発による社会問題[Bebbington et al. 2008; Jenkins 2015; Velásquez 2017]などである。このような地球規模の問題を論じることも重要だが、そうした問題を論じる際にも、変化しつつある農民の生活や経済実践を踏まえることによって、よりよい民族誌的理解が得

られるはずであろう。なお、上記で触れた近年の数少ない農民の経済実践に関する研究に目を向けると、1980年代には主題的には議論されてこなかった、彼らの都市の影響までを想定した計算方法の在り方が議論されている [Mayer and Glave 1999; Antrosio and Colloredo-Mansfeld 2014]。

本稿では、マイヤーらの研究が先駆的に論じ、近年も議論が続いている農民自身の計算実践、または彼らの将来に対する計画性について、別の角度から考えてみる。複雑系経済学によると、行為主体が世界に働きかけるための膨大な計算や情報の不均等を避けるために、人間は定型的決定に基づく習慣的行動ないしルーティン行動をとるが、そこには一定の有効性が見いだせるという [塩沢 1997a, 1997b]。すなわち、未来予測のように、人間の能力の限界を超えた煩雑かつ膨大な計算が必要な場合、その計算を回避するために、過去の経験値から慣習的行動を持ってきて適用・代用することが有効である。この指摘から、農民の計算実践や未来への予測には、彼らの人生経験も参照点となると考えられる。そこで、彼らの計算方法を追究するために、本稿では、彼らの人生経験に着目する。彼らの現在の生産・販売形態にたどり着くまでの選択のプロセスを、人生経験という観点から分析し、彼らの計算方法、さらには将来に対する計画性を明らかにする。彼らの計算方法を考えることで、彼らと都市との関わり方が分析でき、ひいては流動的なため捕捉することが難しかった、彼らの農村と都市の間を行き来する営為の実態を考察することができる。

本稿が事例として取り上げるのは、カハマルカ県、カハマルカ郡、ラ・エンカニャーダ行政地区、チャンタ・アルタ村と属村のヌエバ・ウニオン (Nueva Unión) である。同山村では、農民の大半が定期的な現金収入を得るために、生乳や乳製品の生産販売をおこなっている。その生産と販売の形態は、後に詳しく述べるが、大きく3つに分類できる。以下では、それらの3つの販売形態の違いに関する農民の選択プロセスを、人生経験の観点から分析する。その選択プロセスには、農民個人の目的のみならず、農村内での家族・社会関係が影響しているほか、彼らの教育や仕事による都市での生活経験が大きく影響している。そのため、彼らは都市に対してどのような志向性を示しているのかを分析でき、かつ彼らの子供の将来に対する配慮も検討できる。このようにして本稿では、特に市場経済によってもたらされる外部の影響により複雑化するカハマルカ県山村の社会状況について、その一端を整理する。

ちなみに、筆者のチャンタ・アルタ村での調査期間は、2013年6月～12月、2014年1月～2月、2015年2、3月、2017年8、9月にかけてであり、使用言語はスペイン語である。また、本稿で取り上げる農民の選定方法については後に述べる。

Ⅲ カハマルカ酪農業とチャンタ・アルタ村

Ⅲ-1 カハマルカ酪農業の概要

カハマルカ県はペルー北部山岳地域⁽³⁾に位置し、カハマルカ市街地は美しい山々に囲まれた標高 2750m の盆地である (図1 参照)。気候は年間平均気温 15 度と清涼で、平均最高気温は 20.2 度、平均最低気温は 6.1 度である。雨季 (10 月～3 月) と乾季 (4 月～9 月) に大別され、年間降水量は約 729mm で雨季に集中している⁽⁴⁾。同市街地は温泉街として有名で、国内外の観光客が多く訪れる街である。

同県の主要産業は観光業と鉱山業、そして酪農業である。その酪農業の歴史はここ 100 年くらいのものである。1917 年にスペイン人の大土地農園 (アシエンダ)⁽⁵⁾ で初めて商業的な搾乳目的で牛が飼育された [Boucher and Guégan 2004]。スペイン人征服以前のペルーではラクダ科動物を飼育していたが、乳利用の文化はなかった。そのため搾乳目的の牛飼育はヨーロッパ由来のものである。次第にカハマルカ県各地のアシエンダで乳牛が飼育されるようになり、1930 年代にはリマに乳製品が出荷されるようになった。また、1940 年代に北海岸都市でサトウキビプランテーションが好景氣を迎え、人口が増加した。同じ北部にある同県は畜産物や乳製品の供給や労働力プールの地として

発展し、盛んに人々が北海岸都市に移動していった [Deere 1990]。1990 年には、同県では約 30,000 世帯が生乳生産をし、平均 5 人家族で平均所有乳牛数は 4-5 頭、1 日に平均 390,000ℓ の生乳が生産されている [Boucher 2001]。

III-2 チャンタ・アルタ村と村人の生業

カハマルカ市街地から乗り合いバスで北に 2 時間半程行った、標高約 3500m のところにチャンタ・アルタ村の中心地がある (図 2 参照)。同村は正式にはチャンタ・アルタ中心村 (el Centro Poblado de Chanta Alta) と呼ばれ、いくつかの属村の中心の村のことである⁽⁶⁾。この村には、聞き取り調査によると約 200~240 世帯の村人が暮らしている。なお以下では、比較のために、属村の 1 つであるヌエバ・ウニオンも併せて考える。ヌエバ・ウニオンは、チャンタ・アルタ中心村から徒歩で 30~40 分ほどにあり、バイクでは 10 分程度の距離にある。同属村には、聞き取り調査によると約 60 世帯の村人が住んでいる。チャンタ・アルタ中心村やヌエバ・ウニオンの村人の大半は、畑でイモ類やマメ類などを栽培する農民であり、それらの作物は自家消費目的のものである。彼らは畑作業と並行して乳牛などの家畜の世話をおこなっている。チャンタ・アルタ中心村の村人は、家の近くに囲いを設けた牧草を設置してウシなどの家畜を飼う者や、ヌエバ・ウニオンに牧草地を設置してそちらでウシを飼う者がいる。ヌエバ・ウニオンの村人は、家の近くに牧草地を設けて、そこでウシなどの家畜を飼



図1 カハマルカ県の位置 [INEI 1994 を基に筆者作成]

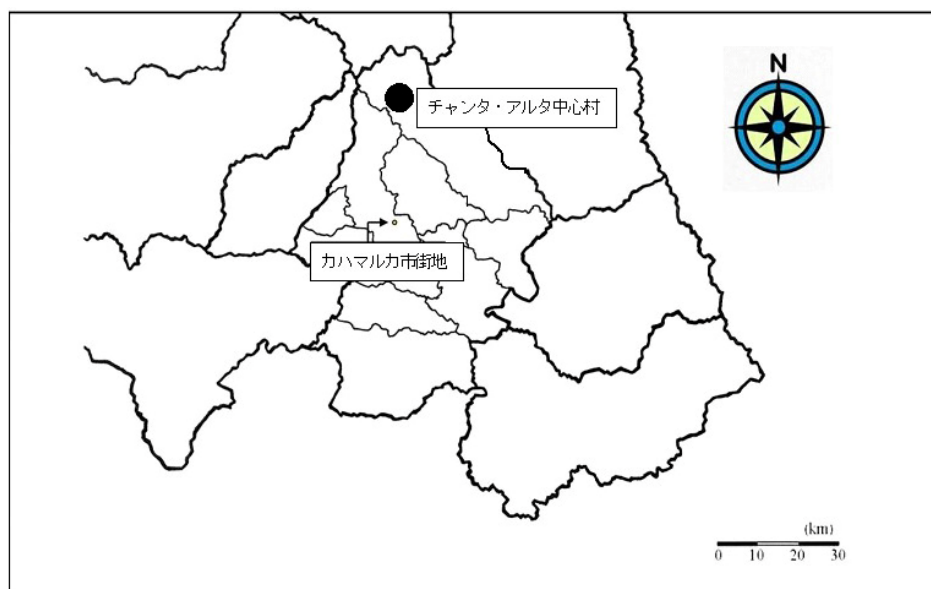


図2 チャンタ・アルタ村の位置 [Peisa S. A. C. 2004 を基に筆者作成]

っている。それぞれの土地は、農村で割り当てられたものでなく、個人所有の土地として購入したものである。なお、各村における世帯の雌ウシの頭数や主な収入活動については、アンケート結果のグラフを用いて後に述べる。チャンタ・アルタ中心村やヌエバ・ウニオンの酪農業を営む農民は、村のチーズ生産者に生乳を販売したり、週末のチーズ定期市で生チーズを売ったりしている。彼らは販売した生乳やチーズの量・質に応じて週末に現金を得ている。山村で収入を得る仕事は他にもあるが、どれも雇用が不安定である。それに比べて、村での乳製品販売は安定した収入が見込めるものである⁽⁷⁾。またチャンタ・アルタ村には、他の村人の畑で農作業を手伝うことで賃金を得る農業労働（peon）があり、乳牛を所有していない農民はよくこれを利用している。さらに、特にチャンタ・アルタ中心村の村人の中には、定期市の時だけ営業するレストランや雑貨店などの店を営む者や、村の近くにある鉱山に出稼ぎに行く者などもある。

冒頭でも述べたが、この村での生乳及び乳製品の生産販売形態は大きく分けて 3 つ存在する。1 つは、生チーズであるケシーリョ（quesillo）⁽⁸⁾ に加工してチーズ定期市で販売するもの。2 つ目は、毎朝生乳を近隣のチーズ生産者に持っていくもの。3 つ目は、近隣農民から生乳を買い取り、設備を備えた製造所でフレッシュチーズ（queso fresco）⁽⁹⁾ やティポ・スイソ（tipo suizo）⁽¹⁰⁾ などのチーズを生産し、都市に出荷するものである。ちなみに、調査をした農民の中で生乳を販売して、かつケシーリョを販売するという変則的な者はいなかった。これは、生乳を販売する農民は毎日必ずほとんど全ての生乳を提供するため、自家消費用のケシーリョを作ることはあるが、販売用のケシーリョを作る余裕を持たないためである。

Ⅲ-3 生乳及び乳製品の生産

チャンタ・アルタ中心村の総世帯の 1/4 にあたる 65 世帯と周辺村のヌエバ・ウニオンの総世帯のほぼ 1/3 にあたる 17 世帯に、半構造的インタビューによるアンケート調査を実施した。インタビューをした対象世帯はランダムにピックアップした。図3から8はその結果を示したものである。「雌ウシ頭数別」（図3、図4参照）と「収入手段別」（図5、図6参照）のアンケート結果を見ると、チャンタ・アルタ中心村では、雌ウシ頭数を 0 頭と回答する農民が多い。雌ウシを飼育していない

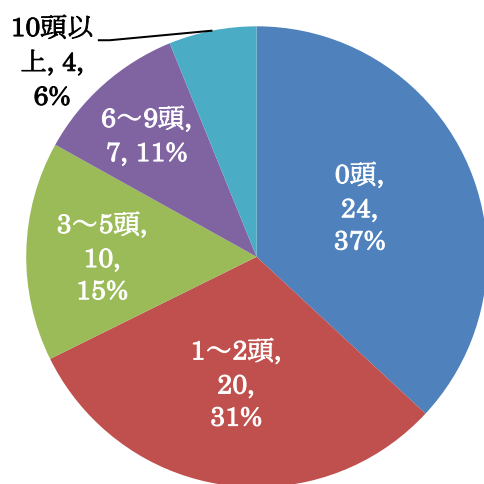


図3 チャンタ・アルタ中心村の雌ウシ頭数別の世帯の割合 (n=65) [筆者作成]

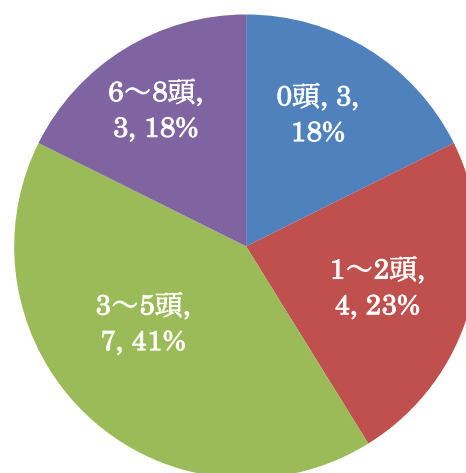


図4 ヌエバ・ウニオンの雌ウシ頭数別の世帯の割合 (n=17) [筆者作成]

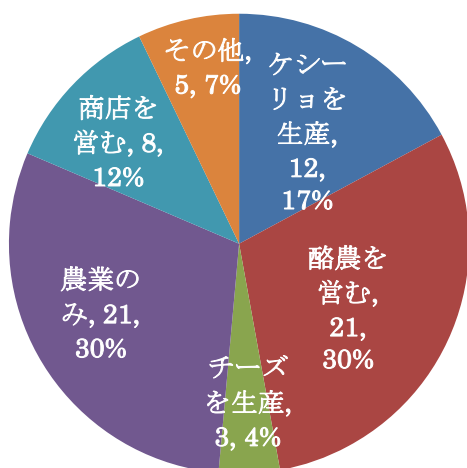


図5 チャンタ・アルタ中心村の収入手段別の世帯の割合 (n=65) [筆者作成]⁽¹¹⁾

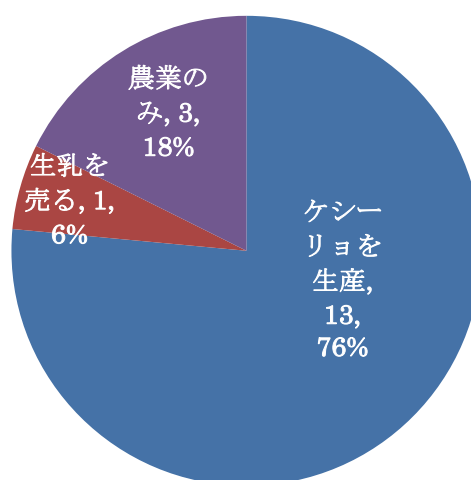


図6 ヌエバ・ウニオンの収入手段別の世帯の割合 (n=17) [筆者作成]

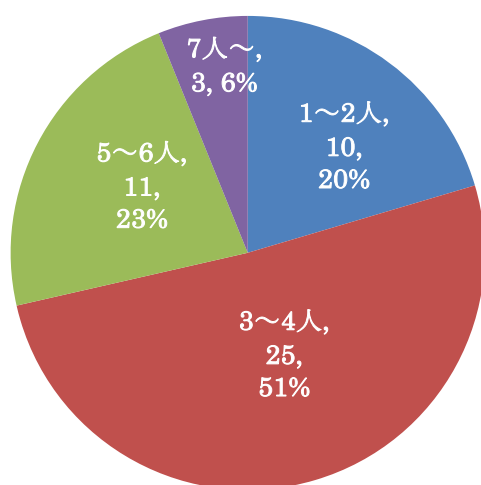


図7 チャンタ・アルタ中心村の家族の人数別の世帯の割合 (n=49) [筆者作成]

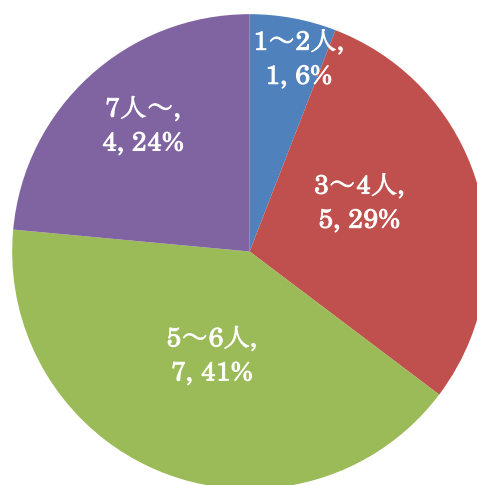


図8 ヌエバ・ウニオンの家族の人数別の世帯の割合 (n=17) [筆者作成]

農民の大半は、定期市の時だけ営業するレストランや雑貨店などを経営している。そうした農民は都市に生活の拠点があり、平日は都市で暮らし、週末の定期市の際に村に来て商売をおこなうという生活スタイルをとっている。そのような農民は、村で親戚と共同で耕作をしており、収穫物の一部を得ている。ヌエバ・ウニオンでは定期市が開かれないため、レストラン経営などをおこなう者もなく、生業は専ら農業と酪農業である。そのため、生産資本となる雌ウシ頭数の割合は3～5頭と回答する割合が比較的多い。そしてヌエバ・ウニオンでも0頭と回答する者はおり、そのような村人は日雇いの農業労働（peon）で生計を立てている場合が多い。またヌエバ・ウニオンでは、チャンタ・アルタ中心村と比べると、ケシーリヨの販売によって収入を得ている者が多いことが理解できる。

「家族の人数別」（図7、図8参照）の項目では、チャンタ・アルタ中心村では3～4人という回答が多く、多くの場合は夫婦とその子供からなる核家族である。ヌエバ・ウニオンでは5～6人という

回答が多く、同じ核家族の形態であるものの、チャンタ・アルタ中心村よりも子供の数が多し。子供の数が多しほど、世帯の労働力は多いといえるが、その分生活費や教育費が多くなり、財産分与の心配も大きくなる。本稿では、彼らの子供の将来に対する配慮についても、彼らの経験的な計画性を考えるために分析の対象とする。

IV ケシーリヨを作る農民、生乳を売る農民、チーズを生産する農民

ここでは、村での酪農業における生乳販売、生チーズ販売、専門的なチーズ販売という3つの形態を、農民はどのような選択のプロセスから結果として選び取ったのか、を具体的な事例を挙げて民族誌的に論じる。

登場人物は、チャンタ・アルタ中心村のケシーリヨを作る農民1名、ヌエバ・ウニオンのケシーリヨを作る農民2名、チャンタ・アルタ中心村で生乳を売る農民2名、チャンタ・アルタ中心村のチーズ生産者1名の合計6名である⁽¹²⁾。

ちなみに、村人の大半は農業を生活の基盤としており、その点で農民であるが、酪農に携わる農民について、内容に基づくある程度の社会的区分が存在している。すなわち、ケシーリヨを作る農民や生乳を売る農民は単に「酪農家」(lechero)と呼ばれるのに対し、ティボ・スイソなどのように多くの初期投資を必要とするタイプのチーズの生産者は「チーズ生産者」(quesero)と呼ばれ、しかも、村人たちの会話を聞く限りでは、前者と後者は暗黙のうちに社会的に区別されている。そこで、確かに当該農村の酪農業の販売形態として3通りあるが、本稿の分析としては、前者の社会区分である「酪農家」の選択について主題的に取り上げ、補足的に「チーズ生産者」の状況を示していく。

チャンタ・アルタ村での調査は、村人のサウル(男性、30代)の案内のもとで実施された。調査の手順としては、彼の案内によって村人と話し、話にあがった人物にインタビュー調査をおこなう場合や、村を歩いていて偶然知り合った人物にインタビューをおこなう場合が大半であった。そのため、ここでの登場人物をはじめとする調査対象者は、彼の知り合いである場合が多い。この点で、これらの事例には偏りがあるかもしれないが、チャンタ・アルタ村の事象の一端が示されていることは確かである。

【事例1】チャンタ・アルタ中心村でケシーリヨを作る農民：クリスティーナ(女性、50代)

クリスティーナは、チャンタ・アルタ中心村に住んでおり、この村で育ち、23歳のときに結婚して、4人の子供(男2人、女2人)をもうけた。長男と長女は結婚しており、下の2人の子供のうち、次女は家事を手伝い、次男は中学校(Secundaria)⁽¹³⁾に通う。現在、彼女の家では、彼女夫婦と長女とその子供(長女の夫は近くに住む)、次女と次男の6人で生活しており、長男夫婦は北海岸都市に住んでいる。彼女は8頭のウシを飼っており、毎朝搾乳をし、その後ケシーリヨを作る。その仕事のほとんどは、今では長女と次女の仕事となっている。毎週末のチーズ定期市にケシーリヨを持っていき、仲買人に売っている。ケシーリヨの作り方は、両親から教えてもらった。一方で彼女が結婚する際に、両親は家畜の分与をしなかった。そのため、夫は農業をして、彼女は定期市で食堂を開いて昼食を売ること、こつこつとお金をためて二人で家畜を増やしていった。今では、自分の子供たちに分与できるほど家畜を所有しており、食堂はやめてしまった。

彼女のケシーリヨ生産販売による家計の状況は、表1の通りである。

一緒に暮らす家族	夫、クリスティーナ、長女(20代)とその子供(2歳)、次男と次女 計6人
家畜数	クリスティーナ夫婦：雌ウシ8頭、豚2頭 子供：各雌ウシ2～3頭
生乳量	1日：約15～30ℓ 1週間：約200ℓ
ケシーリョの生産量	1日：約3～6kg 1週間：約40kg
ケシーリョ販売での1週間の収入	約40kg×9ソル/kg=約360ソル (※調査時は乾期だったので、買い取り価格は高値であった。)
1週間の消費	ジャガイモ、米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入：約160ソル (※電気、水道などは、約30ソル/月、また次男の学費に約250ソル/月)
手元に残るお金	ほぼ残らない～約200ソル
夫の仕事	農業、家庭消費目的

表1 クリスティーナのケシーリョ生産販売による家計の状況⁽¹⁴⁾ [2013年8月調査記録より筆者作成]

クリスティーナ夫婦は雌ウシを8頭飼っており、子供が16歳になるときに各自に2～3頭の雌ウシを分け与えている。多くの家畜を所有しているため、収入から通常の消費を差し引いても手元にお金が残る場合がある。彼女が子供の頃は、チャンタ・アルタ村には小学校しかなく、20歳代の頃に村に中学校ができた。彼女は中学校に通うことができなかったため、子供たちは中学校まで通ってほしいと願っている。彼女は、子供の将来を含め、村で生活することを次のように話した。「両親から家畜をもらわなかったから、(夫と)二人だけで家畜を増やしたわ。子供たちにも家畜を渡し、彼らが結婚したときには、土地も分け与えるつもりよ。子供たちはお金をくれないし、手伝ってくれるときもあれば、そうでないときもある。誰も助けてくれないから、全部自分たちでするしかない。子供たちには学費まで援助したから、後は子供たちのしたい通りにして欲しい。でも、都市で働いて欲しいとは思わないわ。チャンタで暮らして欲しい。(村には)他に仕事がないから、子供たちにウシを渡して、お金を手にして欲しかったの」(2013年8月の調査記録より)と明るく話した。両親から十分な援助をもらうことができず、全てを夫と二人だけでやってきた彼女だからこそ、説得力を持つ語りである。

彼女は子供たちを中学校まで通わせて、後はしたいようにして欲しいと言う一方で、子供たちには村に残って欲しいと願っている。村には、十分な仕事がないことを実感しながら、そのように考えることは興味深いことである。クリスティーナ家族は都市に親戚がおらず、都市へ出ていくためのつてがほとんどないことは確かである。そのため彼女は、子供たちが都市に出て、あてのないまま職を探すよりも、村に残って働くことの方が確実に生活できると考え、酪農業で生計を立てていって欲しいと望んでいる。言い換えると、子供たちが都市で仕事を見つける能力があるかないかにかかわらず、村では家畜と牧草さえ所有していれば生活はできる。だからこそ、彼女はその準備をしてあげれば、子供の将来に心配はないと思っており、そして自分にはそれ以上のことはできないとも思っている。ケシーリョ作りは、スペイン人征服期に広まった技術だが、この地域では既に親から子へと伝える、「伝統的」と言い得る生産方法となっている。彼女にとっては、村での生活と伝統的なケシーリョの生産販売の方が、未知の生活である都市での暮らしよりも馴染み深く、魅力的に映っているのである。

【事例2】ヌエバ・ウニオンでケシーリョを作る農民①：カルメーラ（女性、30代）

カルメーラはヌエバ・ウニオンに住んでいる。彼女は、夫と4人の子供の6人で生活している。子供たちは、全員男の子で、小学校に通っている。彼女は2頭の雌ウシを飼っており、毎朝搾乳し

た生乳からケシーリョを作って、週末にチャンタ・アルタ中心村の定期市でそれを売る。以下に、ケシーリョを売る彼女の家計の状況を示す（表 2 参照）。

一緒に暮らす家族	夫、カルメーラ、4 人の子供(小学校に通う) 計 6 人
家畜数	雌ウシ：2 頭
生乳量	1 日：約 10～11ℓ 1 週間：約 70～75ℓ
ケシーリョの生産量	1 日：約 1～2kg 1 週間：約 6～7.5kg
ケシーリョ販売での 1 週間の収入	約 7.5kg×8.5 ソル/kg＝約 64 ソル/週 (※調査時は乾期だったので、買い取り価格は高値であった。)
1 週間の消費	ジャガイモ、米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入： 収入ほぼ全てを消費に使う
手元に残るお金	ほぼ残らない
夫の仕事	農業、畑での賃金労働 (peon)、不定期な土木作業：50～100 ソル/週

表 2 カルメーラのケシーリョ生産販売による家計の状況 [2013 年 9 月調査記録より筆者作成]

なぜケシーリョを作るのか、なぜ生乳を売らないのかと聞いたところ、カルメーラは次のようにこたえた。「チーズ生産者はチャンタ・アルタ（中心村）に住んでおり、毎日生乳を運ぶのは大変。ケシーリョ作りは、週に一回売りに行けばいいだけだから、負担が少なくていい。本当はチーズ生産をしたいのだけれど、生乳が少ないからできないわ。…(中略)…定期市では、同じ仲買人に売っている。(毎回) 別の人に売る人もいるけど、『信頼』(confianza) が大切だから同じ仲買人に決めている。別の人とは、来ない時があったり、買い値が安かったりするから。この村にも信頼はないわ、信頼は大切よ」(2013 年 9 月の調査記録より)。

チャンタ・アルタ中心村にはチーズ生産者がいるが、ヌエバ・ウニオンから徒歩で 30～40 分かかるため、毎朝生乳を運ぶことは大変な作業になる。一方、ケシーリョを作れば、週末の定期市に一回持って行くだけの作業で済む。そのため、カルメーラはケシーリョ作りを選択した。彼女のように、作業コストや作業時間を比較したうえで、ケシーリョ作りを選択する農民はヌエバ・ウニオンには多くみられる。また、ケシーリョを販売する農民にとって、定期市での販売交渉は避けて通れない。カルメーラのように、仲買人との信頼関係を基準に取引相手を選ぶことも 1 つの判断である⁽¹⁵⁾。彼女は信頼関係を利用するなどの交渉力によって、ケシーリョの販売で安定した利益を得ている。他方、彼女は村内にも信頼はないと述べている。村人たちの様子を見てみると、村の中では約束の時間に現れるとか、借りたものやお金を返すということが、信頼の証明になる。それ以外にも、村内の相互扶助や連帯というような社会的紐帯にも信頼は欠かせないが、そういったものは現在では薄れてしまったのだろうか。注 15 にも挙げたが、別論文 [古川 2018] を参照されたい。加えて、彼女は子供たちの将来について、「商売の能力を身に付けてほしい」と願っている (2013 年 9 月の調査記録より)。先述のクリスティーナとは異なり、彼女は子供が望むなら都市に出ていっても構わないともいう。

【事例 3】ヌエバ・ウニオンでケシーリョを作る農民②：ローサ（女性、50 代）

ローサはヌエバ・ウニオンの中でもチャンタ・アルタ中心村に比較的近いところに住んでおり、夫と彼女、そして 5 人の息子たちとの 7 人暮らしである。上の息子 3 人は中学校を卒業し、下の息子 2 人は中学校に通っている。彼女夫婦は 3 頭の雌ウシを飼っており、5 人の息子にも 1 頭ずつ分

与している。彼女はケシーリヨを販売するが、その家計状況は表3の通りである。

一緒に暮らす家族	夫、ローサ、5人の子供(下の2人は中学校に通う) 計7人
家畜数	ローサ夫婦：雌ウシ3頭 5人の子供：1頭ずつ
生乳量	1日：約16～17ℓ 1週間：約110～120ℓ
ケシーリヨの生産量	1日：約3kg 1週間：約20kg
ケシーリヨ販売での1週間の収入	約20kg×9 ソル/kg=約180 ソル (※調査時は乾期だったので、買い取り価格は高値であった。)
1週間の消費	米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入：約200 ソル
手元に残るお金	ほとんど残らない
夫の仕事	ケシーリヨの運搬、農業、畑での賃金労働 (peon)：50～100 ソル/週

表3 ローサのケシーリヨ生産販売による家計の状況 [2013年9月調査記録より筆者作成]

ローサはケシーリヨを作っているが、定期市には持って行っていない。週に2回、彼女の夫が乗り合いバスでカハマルカ市街地までケシーリヨを運び、そこで決まったチーズ生産者に売っている。なぜカハマルカ市街地で売なのかと聞くと、「村人は、各自で特定の販売相手 (cliente) を持っている。私の販売相手はカハマルカ市街地にいて、市街地はこの村よりも買い値が高いから運んでいる」(2013年9月の調査記録より)と彼女は答えた。雨期や乾期などの季節によってケシーリヨの買い値は変動するが、市街地では変動幅が少なく、極端な値崩れはあまりない。そのようなメリットがあるため、彼女は運搬コストをかけてでも、安定した高収入を目指したのである。そして彼女は、毎週のケシーリヨの出荷量と収入を台帳に記帳しており、その記録からも市街地の方が買い取り価格に大きな変動がないことがうかがえる。また彼女は、市街地に親戚が住んでいるため、頻繁な運搬でもコストを抑えることができるという。

流動的に都市と農村を行き来する彼女の家族は都市の生活にも理解があり、子供たちには学校を出たら都市で暮らしてほしいと考えている。しかし現実には、上の息子たちは学校を卒業しても、村でローサ夫婦と暮らしており、家の手伝いや大工仕事をしている。彼女は、チャンタ・アルタ村の中心地から離れた周辺村に住み、「伝統的な」生産であるケシーリヨ作りで家計を維持している。そうでありながら、彼女は都市の生活に理解を示し、その生活に親しみを感じている。それだけではなく、出荷量を記録することで、経験的にだけでなく実証的に市場の変動に対応でき、より現実的な利益の追求が可能となっている。同じケシーリヨ作りを選択し、チャンタ・アルタ中心村に住む【事例1】のクリスティーナとは対照的である。

【事例4】チャンタ・アルタ中心村で生乳を売る農民①：サウル (男性、30代)

次に紹介するのは、案内人のサウルの事例である。彼は、妻とその母親、2番目の娘の4人で、チャンタ・アルタ中心村の広場近くに住んでいる。彼は、カハマルカ市街地にも住まいを持っている。それは正確には義父の家であり、そこには中学校に通う長女と妻の父親、妻の姉妹が暮らしている。市街地に用事がある時には、彼はその家で生活しており、都市と農村を行き来する流動的な生活スタイルをしている。家畜や牧草地は村にあるため、留守にするときは隣に住む、義母の妹家族が家畜の面倒をみている。家畜は、雄ウシ1頭と雌ウシ8頭、ウマ2頭、ブタ2頭を飼っており、そのほとんどが義母の所有である。毎朝、歩いて20分ほどかかる牧草地に出かけ、搾乳をして、近くのチーズ生産者に生乳を運んでいる。搾乳などの仕事は、義母と妻の仕事であり、生乳をチーズ生産者に運ぶのは彼の仕事である。チーズ生産者は彼の甥っ子であり、そのような親族関係ゆえに、

彼は生乳販売を選択している。だが、彼の義母は「(家事や他の仕事が忙しくて) 時間がないので、ケシーリョは作らない。でも、ケシーリョの作り方は知っているので、自分たちが食べる分くらいは、たまに作る」(2013 年 9 月の調査記録より) と生乳の販売を選択した理由を述べていた。以下に、彼の生乳販売による家計の状況を表 4 に示す。

一緒に暮らす家族	サウル、妻、妻の母親、サウールの次女 (2 歳) 計 4 人 (カハマルカ市街に、妻の父親、サウールの長女 (15 歳)、妻の姉妹が暮らす。)
家畜数	義母: 雄ウシ 1 頭 雌ウシ 8 頭 ブタ 2 頭 サウル夫婦: ウマ 2 頭
生乳量	1 日: 約 15ℓ 1 週間: 約 100~110ℓ
生乳の販売方法	サウールの甥っ子がチーズ生産者をしており、彼のもとに生乳を販売している。
生乳販売での 1 週間の収入	約 110ℓ×1 ソル/ℓ=約 110 ソル
その他の収入	サウル: 不定期の土木工事、農業労働 (peon) 50~100 ソル/週 義母: 定期市でビールなどを売る、編み物の工芸品を作る 30~60 ソル/週 義父: 鉱山で働く 1000~1200 ソル/月
1 週間の消費	米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入: 約 150~200 ソル (※子供の教育費や文房具代に約 300 ソル/月)
手元に残るお金	村ではサウル夫婦の手元にはほぼ残らない。 義父のおかげで世帯全体では、約 1000 ソル

表 4 サウールの生乳の販売による家計の状況 [2013 年 9 月調査記録より筆者作成]

サウルは市街地に比較的頻繁に出かけるため、都市の生活に強い関心がある。彼が、上の娘を市街地の中学校に通わせていることについて質問すると、次のようにこたえた。「(市街地の学校は) 教育の質がいいから、(上の娘を) 市街地の中学校に通わせている。下の子も、小学校を卒業したら、市街地の学校に通わせる予定だ。…(中略)… (子供たちを村外の学校に通わせると) 離れ離れに生活することになり、寂しくなるが、その方が子供の教育としてはいい。将来、子供たちにはより専門的な職業について欲しい。そのためには、大学も出て欲しい」(2013 年 9 月の調査記録より)。彼は、子供の教育には熱心であり、彼自身の収入のほとんどを子供の教育費や必要な雑費に使っている。彼自身は中学校までしか出ていないが、村の中では人望があり、交友範囲も広いので、以前は村長の秘書をしていた。そのような経験から、彼の中で、専門的な知識や技能を身に付けることと、仕事での高収入とが結びついたと考えられる。

サウルの家では、農業と酪農業のみでなく、義母が定期市でビールなどの飲み物を中心に販売し、商売をしている。彼女は一本 4.50 ソルのビールを、5 ソルで売っている。そして彼女は、一週間に約 30 ソル以上売り上げている。サウルは、定期市の際に友人や知り合いに会ったら、義母の雑貨店に誘って、店の前でビールを飲み交わして、彼女の売り上げに貢献しながら店を手伝っている。義母やサウルは、ビールの代金を計算して、お釣りを払うという簡単な収支計算ができる。それだけでなく、毎日の商品の売り上げを帳面に記帳し、その記録をもとに、彼らは次回の販売に必要な分だけの商品を都市の商人に発注している。その発注は、在庫が少なすぎることも、余りすぎることもない。彼らは簡単な収支計算だけでなく、過去の記録を基に商店を運営するほど、市場経済の原理を理解しているといえる。

村ではレストランや雑貨店を副業的におこなう農民は多く、彼の家族も農民でありながら、商売

人として働いている。彼の家族は、副業を持たない農民よりは市場経済の原理を理解しており、その分、利益追求や収入の向上にも関心がある。同じチャンタ・アルタ中心村に住む【事例 1】のクリスティーナと比べると、彼の家族は村内よりは村外に目を向けた、外向的な暮らしをしているようにみえる。

【事例 5】チャンタ・アルタ中心村で生乳を売る農民②：ファナ（女性、30 代）

ファナはクリスティーナの姪にあたる。会う時はいつも、彼女は子供服の編み物をしていた。話し好きの彼女は、しゃべり始めるとあれやこれやと色々な話を聞かせてくれる。ファナは、チャンタ・アルタ中心村の中心から少し離れたところに住んでおり、夫とまだ小学校にも通っていない 2 人の子供の 4 人家族である。彼女は毎朝、獣道のような細い坂道を歩いて上って、少し上のチーズ生産者のもとに生乳を運んでいる。そこで、集まってくる村人たちと日課の世間話をして、下に降りてきては、今度はクリスティーナの家で世間話をして、帰っていく。

彼女の生乳を売る家計の状況は、表 5 の通りである。

一緒に暮らす家族	夫、ファナ、子供 2 人 計 4 人
家畜数	雌ウシ 3 頭 ブタ 2 頭
生乳量	1 日：約 10ℓ 1 週間：約 70ℓ
生乳販売での 1 週間の収入	約 70ℓ×1 ソルℓ=約 70 ソル (※調査時は乾期だったので、買い取り価格は高値であった。)
1 週間の消費	米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入：約 100～200 ソル
手元に残るお金	なし
夫の仕事	夫：自家消費用の農業、農業労働 (peon) 70 ソル/週

表 5 ファナの生乳販売による家計の状況 [2013 年 8 月調査記録より筆者作成]

ファナは、「ケシーリョ作りには、時間や手間がかかるからやらない」(2013 年 8 月の調査記録より) というように、ケシーリョ作りはしておらず、生乳を売っている。生乳販売による収入だけでは、世帯消費をまかなうことはできない時もあり、農業労働をしている夫の収入に頼る場合もある。彼女の家族はその日暮らしの生活であり、世帯収入のほとんどを消費にまわしている。子供の将来に関しては、彼女は次のように述べている。「(子供たちには) 学校を出たら、やりたいことをして欲しい。都市では仕事がないかもしれないから、この村で一緒に暮らすのもいいかもしれない」(2013 年 8 月の調査記録より)。その日暮らしの生活をする彼女の世帯の経済レベルでは、子供を大学まで通わせられるかどうかは分からない。そのような心配から、彼女は、子供たちが都市で生活する未来像をうまく描けないでいる。

クリスティーナのように子供に十分な援助ができる場合でも、ファナのように十分な援助ができない場合でも、子供の将来を心配する親心は同じであり、両者とも「子供のやりたいようにやって欲しい」といいながら都市で仕事をするに対しては懐疑的である。ファナの子供たちはまだ幼いため、世帯労働力としては十分でないどころか、むしろ手がかかる存在である。そのため、その分の家事や育児、仕事の負担がかかるため、ケシーリョを作ることで自身の労働を増やすことはない。また、彼女にとって毎朝チーズ生産者のもとに通い、村人とおしゃべりをするのは楽しみの一つでもあるから、彼女は生乳販売を選択した。同じように生乳販売を選択している【事例 4】のサウールの家族とは異なり、彼女は都市的な生活に不安を抱えている。

【事例6】 チャンタ・アルタ中心村でチーズを生産する農民：ジョイ（男性、30代）

ジョイは、チャンタ・アルタ中心村の中心からバイクで15分程行ったところに住んでいる。もう一人のチーズ生産者であり、チャンタ・アルタ中心村の成員でもあるワルネルと共同出資して、村の中心地に近いところに製造所を設け、ガスコンロや大鍋、チーズ生産器具、チーズの型などの設備を整えた。彼らは、円熟チーズのティポ・スイソを専ら生産しており、チーズ作りのほとんどをジョイがやっている。他方、ワルネルはリマへのチーズの出荷や出荷先との交渉をやっている。

彼の家族は、彼と妻、11歳の息子の3人である。以下の表6に、彼のチーズ生産による家計の状況をまとめている。

一緒に暮らす家族	ジョイ、妻、子供1人(11歳) 計3人
家畜数	雌ウシ3頭 ブタ2頭
搾乳する生乳量	1日：約20ℓ 1週間：約140ℓ
チーズ生産に使用する生乳量	1日：約200～250ℓ 1週間：約1400～1750ℓ (顧客：12人 買い取り価格：1ソル/ℓ)(※価格の変動あり)
生産するチーズ量	ティポ・スイソのみ生産：1日約30～35kg 1週間約250kg (売り値：10ソル/kg)
1週間の収入	250kg×10ソル/kg = 230ℓ×1ソル/ℓ×7日=1090ソル (ティポ・スイソの売り上げ－農民からの生乳の買い取り代金) (※仕事のパートナーと折半のため、収入は450～500ソルという。)
1週間の消費	米、パスタ、砂糖、油などを定期市で購入：約100～200ソル
手元に残るお金	約250～300ソル
妻の仕事	農業、家事

表6 ジョイのチーズ生産による家計の状況 [2013年9月調査記録より筆者作成]

ティポ・スイソは、リマのチーズ市場では年間を通してほとんど売り値の変動はないが、村では乾期や雨期によって生乳の生産量が変わるため、生乳の買い取り価格には変動がある。調査時は、搾乳量の落ち込む乾期だったので、ケシーリョ価格の変動同様に、ティポ・スイソの買い取り価格は高かった。そのためジョイの手元に残るお金は多く、先述のケシーリョを作る農民や生乳を売る農民とは明らかな差がある。専門的なチーズ生産をおこなうためには、設備投資の資本金や生乳の買い取り費用が必要であり、それらのコストを埋めるために利益の一部を運用しなくてはならない。そのため、その販売形態は、明らかにケシーリョを作る農民や生乳を売る農民とは異なっており、村に「酪農家」と「チーズ生産者」の区分が存在することも理解できる。

ジョイはもともと「チーズ生産者」ではなかった。今の仕事をはじめの前は、畑仕事や家畜の世話しかしておらず、「酪農家」と呼ばれる存在であった。6年前に、この村で ITDG (Intermediate Technology Development Group) の農村開発⁽¹⁶⁾がおこなわれた際に、ジョイはチーズ作りを教えてもらい、チーズ生産に必要な能力を身に付けた。その後、当時所有していた家畜を売って、ワルネルと共にチーズ製造所を始めた。以前までは、ほとんど何も持っていなかった青年が、技術を習得して、設備投資に財産を費やすことで、収入も一段上がった「チーズ生産者」になり、周りにもそのような認知されるようになった。このような経験は特殊なものかも知れないが、チャンタ・アルタ中心村には数名存在する。

ジョイには11歳になる一人息子がいるが、その子の将来について彼は次のように話していた。「子

供には、勉強をして、中学校を出てほしい。将来は、カハマルカの街に出て、働いてほしい。そのためには、大学も出てほしい。より専門的な技術を身に付けてほしい」(2013年9月の調査記録より)。彼は、子供が都市で働くことを望んでおり、そのために大学でより専門的な知識・技術を身に付けてほしいと考えている。彼は、農村開発の技術援助のおかげで、収入を格段に上げることができたという経験を持つため、より専門的な技術を身に付ければ、農業や酪農業を続けるより、収入を上げることができるということを経験的に理解している。その実感から、彼は子供により専門的な知識・習得を望み、それが可能になるためには農村よりも都市に出るべきだと考えている。彼のように、都市での生活様式を選好する思いは、【事例4】のサウル同様に強いものであり、ともに商売人としての共通点もある。

V 人生経験に基づく選択

ここでは、事例に挙げた農民たちの選択プロセスについて、彼らの人生経験の観点から整理、分析する。議論の中心は、同じ社会区分に属すると考えられているケシーリョ作りと生乳の販売の間の選択であり、社会区分の異なるチーズ生産については章の最後に触れることとする。

具体的な分析に入る前に、本章における基本的な分析視角を、予め簡単にまとめておく。前章の記述と2章の議論を踏まえて、本章では、農民たちの選択に影響を与えた要素として、以下の三点を主に取り上げる。第一は経済的な側面に関する農民自身の理解、第二は都市に対する農民の関係性及び価値判断、第三は子供の将来についての考え方である。この三点は、従来研究における農民の流動的な営為を捉えるために彼らの計算実践を議論した研究視点を踏まえたうえで、本稿の人生経験に着目した視点を加えたものである。第一の経済的側面では、農民の現在おこなっている生産形態を、彼らはどのような人生経験に基づく「計算」方法から選び取っているのかを分析している。第二の都市に関する点では、農民の農村と都市との行き来において動機となる、彼らの都市に対する考え方を人生経験から考える。最後の子供の将来については、第二の彼らと都市との関係性を踏まえたうえで、どのような将来的な計画を立てているのかを彼らの人生経験から検討する。これらの3つの人生経験の中の選択項目から、以下では、事例の農民の選択プロセスを整理、分析する。

まずは1つ目の農民の経済活動について、事例を比較する。地域的な差異はありながら、ケシーリョを作るか、生乳を売かの選択の違いを示した【事例2】と【事例4】を取り上げる。【事例2】はヌエバ・ユニオンに住むカルメーラであり、【事例4】はチャンタ・アルタ中心村に住むサウルである。カルメーラはケシーリョを作っているが、その理由を「チーズ生産者は、チャンタ・アルタ中心村に住んでおり、毎日生乳を運ぶのは大変。ケシーリョ作りは、週に1回売りに行けばいいだけだから、負担が少なくていい」(2013年9月の調査記録より)と述べている。3章の図5、6をみると、チャンタ・アルタ中心村の農民には生乳販売を選択する者が多く、周辺のヌエバ・ユニオンにはケシーリョ生産を選択する者が多い。両者の選択の違いは、チャンタ・アルタ中心村にいるチーズ生産者との距離の違いであり、毎日の仕事として考えると、ヌエバ・ユニオンの農民は中心村のチーズ生産者のもとに生乳を運ぶのは負担が大きいということである。このような判断の違いは、コンスタントな収入が欲しいという目的と、物理的な距離による労働の負担と効率性を経験的に検討した結果であるといえる。

次に、同じ地域でありながら、ケシーリョを作るか、生乳を販売するかの違いを示した事例を比較してみる。【事例1】のチャンタ・アルタ中心村に住むクリスティーナと、【事例5】の同村に住むフアナについて検討する。フアナはケシーリョを作らない理由を、「ケシーリョ作りには、時間や手間がかかるからやらない」(2013年8月の調査記録より)と述べている。クリスティーナには4人の子供がおり、独立した子供がいるものの、残った子供たちは家事や家畜の世話、畑仕事などを手伝っている。一方、フアナの子供はまだ手がかかる年齢であり、世帯の労働力とはいえない。その

ため、フアナの方は子供の世話や家事などに忙しく、生乳に凝乳酵素を加えてケシーリョを作るひと手間が、彼女にとっては負担となる。つまり、両者の判断の違いは、コンスタントな収入を望むことと世帯の労働力の多寡とを経験的に考慮に入れて検討した結果であるといえる。

先行研究のマイヤーとグレイブによると、会計監査での算出方法と違って、農民は生産コストと利益のみのお金の流れのみに着目して収支計算しているという [Mayer and Glave 1999: 353-355]。つまり、農民の数字に表れる収支計算には労働コストは含まれないということである。他方、本稿の事例において、確かに農民の数字で表れる収支計算では労働コストを含んでいるかは分からないが、彼らの人生経験からの判断では、世帯労働の負担や多寡を考慮したうえで販売形態を選んでいることがうかがえる。筆者が観察する限りでは、当該山村の農民にとって酪農業は農業とは異なり毎日の作業である。そのため、日々の作業における労働負担を少しでも減らしたいという思いから、このような判断が生じていると考えられる。

さらに当該山村の農民たちは、人生経験から別の要因も考慮に入れて販売形態を選択している。その別の要因とは、周りの人間との社会関係である。カルメーラの場合、仲買人との信頼関係によって販売先を選択し、サウールの場合、提供先のチーズ生産者は彼の甥っ子である。また、クリスティーナの場合、ケシーリョ作りは親から教えてもらった伝統的な作り方であり、フアナの場合、チーズ生産者のもとで顔を会わす農民とのおしゃべりは彼女の楽しみの1つである。彼らの生産形態に対する判断には、こうした数字による計算では算出できない人間関係というものの要因の1つとなっている。これらの労働コストや社会関係といった要因の違いから、同山村には生乳販売をするか、ケシーリョを売るかという販売形態の違いが生じている。加えて述べるなら、【事例3】のローサは、カハマルカ市街地のチーズ生産者との関係と、そこから生まれる多くの利益を計算に入れて、ケシーリョ作りを選択したのである。以上から、彼らは人生経験の中での労働の効率性と（販売に有効な）社会関係に関する項目を参照することで、自身にとって最も「利益」が得られる販売形態を選んでいるといえる。

それでは次に、農民たちが都市という外部をどのように感じているのか。彼らと都市との関係について比較分析を試みる。

農民たちの選択が、都市との関係においてははっきりと志向性が別れた2つの選択の事例を挙げる。それは、【事例1】のチャンタ・アルタ中心村に住むクリスティーナと、【事例4】の同村に住むサウールの事例である。クリスティーナは土地や家畜を生活の基盤として考え、村での生活に強く愛着を示している。一方、サウールの家族は市街地にも家を持ち、定期的に市街地に行くために都市の生活に理解があり、家族はビール販売をおこなう商売人としての側面も持つ。このような異なる志向性を示す背景として、次のことが考えられる。クリスティーナには、土地や家畜を資本として増やしてきたという経験から、村の生活を中心とした世帯経済の領域 [cf. Gudeman and Rivera 1990 : 40-46] での活動が中心となっている。対してサウールには、都市の生活にも慣れ、さらに彼の家族は市場原理を理解した商売法を身に付けるという経験から、世帯経済の外に置かれる市場経済において利益を得て生計を立てており、その領域の原理を理解している様子がみられる。

また、【事例1】のクリスティーナと【事例3】のローサは、ともにケシーリョを作ることを選択しているが、前者は内向的な考えを持ち、後者は市街地に積極的に出ていき、流動的な生活をしている。彼女らの人生経験を考えると、この両者の選択の違いはどのような違いに基づくものだろうか。クリスティーナの場合は、母親から教えてもらった料理方法により食堂で昼食を販売することとケシーリョ作りというドメスティックな領域でこつこつと収入を得て、両親から受け継いだ土地や家畜の資本を増やしてきた。つまり、彼女の経済活動は基本的には家庭や農村を含む世帯経済の範囲にとどまる。そうではあるが、彼女には長期的な利益追求の志向性がみられ、実際に、彼女は子供たちに家畜を分与できる程資本を増やしている。他方のローサは、農村と市街地を行き来する流動的な経済活動をおこなっているため、都市の生活に理解がある。さらに彼女は、市場経済の

領域において、過去の記録を基に少しでも多くの利益を追求している。彼女の親戚は市街地に住んでおり、そのため、彼女は市場経済や都市の生活に慣れ親しんでいる。そのように慣れた領域で、彼女は財産を増やし、現在では子供に雌ウシを分与できるようになっている。このように、クリスティーナとローサの選択の違いは、仕方を知っている活動範囲の違いである。ただし、ともに子供に財産を残したいという思いから、利益を多く残そうという志向性がみられる。また【事例 2】のカルメーラは、定期市での仲買人と信頼関係を築き安定した利益を得る程、市場経済（地域マーケット）の領域を理解している。一方で【事例 5】のフアナは生乳販売によってコンスタントな収入を得るが、クリスティーナと同様に、収入源が村内の社会関係の枠内に限られている点で、世帯経済の領域にとどまっているといえる。以上のように、農民の都市との関係における選択の違いには、（長期的な）財産を増やしたいという思いから、世帯経済の領域だけでなく市場経済の領域まで積極的に参入する方法を経験的に理解しているかどうかの判断の差異がみられる。グードマンとリベラは、市場経済を利用することはあるが、農民自身は市場経済の領域を予測しがたい困難な領域と捉え、そこでの成功ではなく世帯経済の枠内での成功を目指していると考えていた [Gudeman and Rivera 1990]。だが農民の中には、サウルやローサのように市場経済の領域に参入して、そこで利益追求に成功する者もいる。今日的な農村の状況では、貨幣経済の浸透は所与のものとなっており、市場経済に積極的に参入して、十分な利益を得る農民が数多くいる。

ただし、こうした農民であっても、村での生活を完全に捨てられるわけではない。ある時、サウルに誘われて、お酒を飲み村の畑に行った。周りは草や木が生い茂る畑の見える一角で、彼は次のように語った。「ここに来ると、自由になれて、リフレッシュできる。私の居場所はここなんだ」（2013 年 9 月の調査記録より）。それを聞いた筆者は、当初は、彼は娘婿として生活しているため、家の中では窮屈なんだろうと邪推した。しかしそれから、チャンタ・アルタ村の人々の生活スタイルを知るにつれて、その考えが変わっていった。カハマルカ県では、歴史的に北海岸都市への商品や労働力の提供がおこなわれてきたため、その村人たちは流動的な生活の特徴とする。近年、南部高地の山村でみられる「開かれゆく」農村共同体 [cf. 鳥塚 2009] が、同県ではずっと以前からみられていたのである。そのような村であっても、農民は村の中の土地または家畜を手放して、完全に市街地や別の都市に移り住むことはしない。彼らは、村の土地を維持するために、定期的に村に帰る。なぜ、そのような面倒なことをするのか、いつしか筆者はこのような疑問を感じるようになった。そのような時に、筆者はサウルの発言を思い出した。農民は、長年同じ土地に暮らし、そこに手を加えることで生活してきた。どんなに市場経済の影響によって村が開かれようとも、彼らの「居場所」は村の中の土地にある。サウルのような農民は、カハマルカ市街地に買い物に行ったり、市街地で生活したりしているが、彼らは都市に出て行ってもそこに居場所はなく、結局村の中の土地に居場所を見出し、定期的に村に戻って来ては、不便だと思われる生活を営むのである。たとえ都市へ出ていく農民であっても、村に戻ってきたいと思わせる力が働いていると考えられる。

次に、3 つ目の子供の将来に対する考え方について検討する。そもそも、子供の将来とは、何年も、何十年も先の遠い未来のことであり、複雑系経済学では、未来についての煩雑かつ膨大な計算を回避するために、過去の経験が適用・代用されるといわれている [塩沢 1997a、1997b]。つまり、子供の将来に対する配慮において、農民たちが自身の過去の経験を参照することは十分考えられる。

【事例 4】のサウルと【事例 5】のフアナは、同じ村落に住み、同じ生乳販売を選択していながら、サウルは都市の生活を理解し、フアナは都市の生活に不安を示している。その違いが、子供の将来に関する考え方の違いに表れている。サウルは子供が都市の大学を出て、都市で働くことを望むが、他方のフアナは子供が都市で生活することに懸念を示している。人生経験から考えると、この両者の考え方の違いは、技術・能力の獲得が収入と結びつくかの経験の有無が大きく関係している。サウルは、村長の秘書を経験した際に、公式書類を作成することやパソコンを使いこなすということなどの技術・能力によって収入を得ていた。つまり、この経験から彼の中では、技術を

身に付けることと、高収入が得られることが直結したのである。さらに、その際に、政府の役人や開発支援者と付き合うことで、彼はより専門的な能力を身に付ければより収入を上げることができると理解した。その経験から、彼は、子供が将来、大学でより専門的な能力を身に付ければ、収入の高い職に就けると確信した。付け加えて、【事例2】のカルメーラと【事例3】のローサは、ともに仲買人やチーズ生産者と特別な関係を築くことで多くの利益を得ている。その関係性を作るためには多くの時間や労力が割かれ、試行錯誤もあったはずである。ローサの場合は、そのような苦勞に対して、台帳に収入を記録することで適切な判断をして乗り切ったのだろう。こうした経験により現在では利益を得るという成功を彼女たちは得ているため、市場での交渉術という技術、場合によっては記録する処理能力と収入が結び付いた経験をしているといえる。そのため彼女たちも、サウル同様に、子供には将来、市場経済の領域で成功してほしいという将来像を描いている。一方、フアナにはそのような経験がない。彼女が技術として持っているのは、農業と酪農業に関するものである。また、彼女は市街地に生活の拠点を持たない。そのため、彼女は都市での生活を具体的にイメージできずに子供が都市で働くことの意義を見出せず、将来働くなら村で生活すればいいという判断を下している。また【事例1】のクリスティーナも、フアナ同様に、市場経済で生き抜く技術を得たという経験がないため、子供には村で生活して欲しいと願っている。以上のような考え方の違いは、子供には安定した暮らしをして欲しいという思いと、どの技術が収入と結びつくかという人生経験とを複合的に考慮に入れた判断の違いである。

最後に、【事例6】のチーズ生産者のジョイについて触れておく。彼はチーズ生産の商売に成功しており、子供が大学に通うことで、より収入の高い未来が子供には約束されていると実感している。そのような成功経験と経済的に豊かな状況から、彼は都市の事情をあまり知らなくても、子供は技術と知識さえ身に付ければ、都市の生活に慣れ、収入も得られるはずだという自信もある。サウル同様に、ジョイは学習や専門的技術が高い収入をもたらすことを経験的に知っている。そのような専門知識や技術を身に付けた人生経験が、都市を身近にしているといえる。

以上のように、チャンタ・アルタ村での酪農業の3つの販売形態のうち、特に生乳販売とケシーリョの販売における選択の違いは、労働の効率性と自身にとって有効な社会関係の利用という観点からの選択の違いである。そして本来、農民は世帯経済の領域で長期的に財産を増幅させ、家を繁栄させてきた。だが、酪農業は牧草や家畜を生産の基盤とする一方で、コンスタントな収入をもたらすものであるため、農民の中には市場経済に参入していく者もいる。そのため一部の農民は、市場経済の領域を自分なりに理解し、時間や労力のコストをかけることで利益を得ている者もいる。農民と都市との関係における志向性の違いは、このように仕方を知っている領域を市場経済の領域まで広げているのか、世帯経済の領域で留まっているかの経験の違いである。また、市場経済の領域で利益を得るためには、簡単な収支計算や帳簿に記録する処理能力、場合によっては専門的なチーズの生産能力のような「特別な」能力や技術が必要であり、そうした能力を身に付けた経験があるかないかが、子供を都市で働かせたいか、村にとどませたいかの判断へとつながる。酪農業が世帯経済と市場経済の双方の領域に関わる生業であるため、都市への志向性や子供の将来への配慮において人生経験の違いによる多様な選択や判断の違いとして表れた。それらは世帯ごとに様々であり、それぞれの目的や経験の違いを表している。特に、事例のローサやサウル、ジョイのような農民は、簡単な収支計算や記録する処理能力、さらには専門的な生産技術などを身に付けることで、市場経済の原理を理解してうえで積極的にマーケットに参入している。さらに彼らは農村と都市とを行き来しており、自然と人やモノ、情報などを行き来させている。

実際、農村に一週間滞在すれば、都市との関係性を含む状況の複雑性の存在を、容易に目にすることが出来る。平日は農業や酪農業をおこなう農民が目立つ鄙びた村が、週末の定期市の際には流行の格好をした若者が増え、電化製品や電子機器などまでも販売する店が立ち並び、都市の一部であるような賑わいをみせる。このように伝統的な生活に固執するのか、近代化に開けるのか、どち

らの方向に進むのか分からない複雑な様相を当該農村は示している。

VI おわりに

本稿では、農民たちの選択プロセスを人生経験の観点から、民族誌的に分析してきた。ここではその分析から、彼らが市場経済を通じてもたらされる都市の影響をどのように自らの経験として認識し、日常の営為の中に取り込んでいるのかについて考察し、彼らの流動的な営為によって複雑化するカハマルカ県山村の社会状況の一端を整理することを試みる。

チャンタ・アルタ村では、様々な乳製品の販売形態がみられたが、個々の販売形態の違いは、日常的な仕事である酪農業をいかに効率よく進めるかという観点と、経験的に彼らにとっての「利益」を得るために有効な社会関係を利用するという観点から、判断された結果である。また、都市との関係性や子供の将来への配慮の分析でみられたように、農民にはそれぞれに仕方を知っている領域があり、彼らの中には市場経済の領域を理解している者もいる。1960年代の南部高地の状況を描いたミッチェルの民族誌でも、既に農村への市場経済の浸透の一端が報告されているが、都市を生活圏とする農民にまでは言及されていない [Mitchell 1991: 102-131]。グードマンらの民族誌では、農民はあくまでも世帯経済の領域で活動して、その領域とは異なるものとして市場経済の領域が描かれている [Gudeman and Rivera 1990: 2]。マイヤーらの研究では、農民と市場経済が計算実践という観点から論じられているが、農民の計算は経済学者のそれとは異なるものとされ、やはり彼らは市場経済ではうまく利益を生み出せないものとして論じられている [Mayer and Glave 1999: 344-345]。

上記に挙げた先行研究で示されてきた農民像とは、クリスティーナのように、農業を基盤に、市場経済の領域を補填的に利用しながら土地や家畜を増やす人物の姿である。他方本稿では、サウルやジョイのような農民も存在することを示してきた。彼らは村での土地に基盤を置くが、サウルの場合、簡単な収支計算をおこなう素養を用いて市場経済に積極的に参入し、子供の将来のために市街地にも生活の拠点を持っており、ジョイの場合、専門的な技術を身に付けて、より多くの収入を得ることで、子供を都市の大学に通わせたいと考えている。彼らの実際の生活や将来設計の範囲が、都市までを包含しているのである。こうした農民は市場経済に積極的に参入するあまり、村の外に出ていく遠心力で飛び出していきそうに見える。しかし、そうした農民であっても、前章のサウールの発言にあったように、彼らは農民であり、その生活の基盤は村での土地や家畜であるということも指摘できる。市場経済の影響によって、村の状況がどのように変化しようとも、彼らの「居場所」は村の中の土地や家畜にある。彼らと村とを結び付けるそれらが、彼らのいつでも帰ってこれる「居場所」として、彼らを村の方へ引っ張る求心力として働いているのではないだろうか。

村内では、市場経済や農村開発の影響により、簡単な収支計算や特別な生産技術などを身に付けたという経験を持つ農民が多い。そうした経験は、村人に対して都市を身近に感じさせ、彼らの馴染みのある領域、またはイメージ可能な領域を村外や市街地にまで広げる。一方、そのような特別な経験を持たない農民は、都市での生活がイメージできず、土地や家畜を増やすという村での生活にこだわるようになる。酪農業はコンスタントな収入をもたらすため農民を市場経済に参入しやすくするものであると同時に、その基盤は牧草や家畜であるため農民の村の生活に固執させるものでもある。ただし、たとえ村から離れて都市に出ていく村人であっても、村の土地はなかなか捨てられないであろう。このように、チャンタ・アルタ村では、市場経済の浸透による特別な経験が村人を外へ導く遠心力として働くと同時に、村の土地が彼らに村に帰ってきたいと感じさせる求心力として働いている。こうした両方に引っ張られる感覚が、現代のアンデス農村を極端に伝統的にするわけでもなく、また極端な近代化に進むわけでもない状況を生み出す1つの要因となっているともいえる。

注

- (1) 1950年代に、メキシコを調査したエリック・ウルフは、次のような概念を提唱した。メソアメリカ農村社会では、土地に対してコミュニティが所有権を持ち、メンバーシップが強く、儀礼によって富の再分配がおこなわれ、村人が一様に「貧しさ」を共有していた。彼はそのような農村社会を「閉じた」農民共同体 (the Closed Corporate Peasant Community) と呼んだ [Wolf 1957 : 1-2]。彼の指摘する農村社会は、村外からの情報や商品を規制するものであった [Wolf 1957 : 6]。ただし、ウルフはラテンアメリカでは「開かれた」農村社会がみられるとも付記している [Wolf 1957 : 6]。
- (2) カルゴ (cargo) とは、スペイン語で「荷物、負担、職務」など、背負わされるものを指す名詞である。この文脈でのカルゴは、中南米の先住民村落でみられる行政・祭祀組織における職務を意味している。つまりカルゴシステムとは、成人男性は祭りや儀礼などの職務を歴任していくことで、村での威信を高めていく階梯システムのことである。ただし、社会的階梯が上がれば上がるほど、祭りなどでの出費や労働負担も多くなる。
- (3) 南米大陸の西側をアンデス山脈が走っており、そのほぼ中央にペルーがある。ペルーの地形は大都市が並ぶ海岸地方 (costa)、多くの農地が集中しているアンデス山地 (sierra)、アンデス東斜面からアマゾン上流域にかけての熱帯雨林地帯 (montaña) という3つからなり、カハマルカ県はアンデス山地に位置する。
- (4) 本文中の気候・気温データや降雨量のデータは、統計資料 [Peisa S. A. C. 2004] を基にした。
- (5) アシエンダ (hacienda) と呼ばれる大土地農園は、16世紀末〜20世紀半ばまでに中米の一部と南米諸国に見られた大農園のことである。カハマルカ県では酪農アシエンダが多く存在し、都市向けの乳製品を生産・出荷していた。そのようなアシエンダの多くは、1960年代後半にベラスコ政権によって実施された農地改革によって解体された。
- (6) 本稿におけるチャンタ・アルタ村の表記は、次のような整理に基づく。「チャンタ・アルタ村」といった場合、チャンタ・アルタ中心村と周辺の属村を含めた、村全体のことを指す。「チャンタ・アルタ中心村」といった場合、チャンタ・アルタ中心村のみである。「周辺の属村」といった場合、ヌエバ・ウニオンなどの属村を指す。
- (7) アンデス山地と熱帯雨林地帯の農村部の貧困率の高さは深刻な状況にあり、特に農地が集中するアンデス山地の貧困の削減はペルー農業において重要な課題である。カハマルカ県はアンデス山地に位置し、独立行政法人国際協力機構 (JICA) [2012 : 4] の報告では同県の貧困率は2001年では77.4% (県別5位) で、2011年では49.1% (県別8位) であった。そのような背景から、同県の各山村では現金収入に関する関心が高い。各村での現金獲得手段には、酪農業以外にも、ウシやブタの家畜を成獣にまで飼育して販売する畜産業がある。畜産業は年に1、2回の収入をもたらす程度であり、定期的な収入をもたらすものとは呼べない。また、鉱山などへの出稼ぎも、現在では雇用が不安定である。そのため、村で定期的に収入を得るためには、乳製品の販売が最も利用されている。
- (8) ケシーリョとは、生乳を温めて、35〜38℃にした後に、粉末状やタブレット状の凝乳酵素を加えて、ビニール袋やザルなどの型に入れて固めただけのチーズのこと。モッツアレラチーズのような食感のフレッシュタイプのチーズであるが、塩などは加えてないため、塩味はなく、乳製品の乳臭さが残るチーズである。
- (9) フレッシュタイプのチーズのことである。生乳を35〜38℃にまで温めた後、粉末状・タブレット状の凝乳酵素やカルシウムなどを加える。その後、凝固した生乳 (カード) を細かく切って、塩を入れ、型に移し替えて乳清 (ホエー) などの水分を抜くことでできあがる。ケシーリョとは違い、塩味がするフレッシュチーズである。
- (10) スイスから伝わった技術で作った円熟タイプのチーズである。作り方は、フレッシュチーズの作り方に似ているが、円熟期間として2週間ほど自然乾燥させる。フレッシュチーズよりも水分が少なく、固いチーズであり、円熟期間を置く分、味に深みが増している。しかし現地での生産方法では、円熟期間は最長でも1週間弱くらいである。
- (11) 図5のグラフはn=65だが、商店を営みつつ、生乳販売またはケシーリョの販売をおこなう世帯がいたため、複数項目の回答を反映している。
- (12) 本稿に登場する農民は全て仮名である。
- (13) ペルーの学校制度は、小学校 (Primaria) 6年のあと、中学校／高校 (Secundaria) 5年、そして大学 (Universidad)

3 年である。本稿では、Secundaria のことを「中学校」と記載する。

- (14) 現地通貨の単位はヌエボ・ソル (nuevo sol) であるが、本稿では単数形のソルで統一する。2013 年 3 月当時では 1 \$ $\approx$ 2.55~2.58 ソルであり、1 ソル $\approx$ 36 円である。山村での物価は日本と比較すると、約 5 分の 1 から 3 分の 1 である。また、生乳とケシーリョの季節による買取り価格の違いについて述べておく。生乳の買い通り価格は年間を通じてさほど変動はない。だが、ケシーリョの買取り価格には季節による変動がある。搾乳量が落ち込む乾季にはその買取り価格は 8~10 ソル/kg まで値が上がり、一方供給が増え、市場が飽和する雨季には 4~5 ソル/kg にまで落ち込む。ちなみに本稿は 2013 年の 8 月~9 月の世帯調査を基にしているため、ケシーリョの買取り価格は乾季のものである。
- (15) チャンタ・アルタ村のチーズ定期市に関する議論は、[古川 2018] を参照されたい。
- (16) 2002 年から 2007 年にかけて、自立した生活手段の促進と貧困削減を目的とするヤチャンプロジェクト (el proyecto Yachan) が、リャウカノ川 (río Llaucano) 流域の地域を対象に実施された。その際、チャンタ・アルタ村落の地域開発組織として、ITDG (Intermediate Technology Development Group) という行政と国際 NGO による組織が設けられた。具体的な取り組みとして、ケシーリョ作りやチーズ生産技術向上の技術指導や、牧草や灌漑設備などのインフラ整備による農村開発がおこなわれた。

参考文献

Antrosio, Jason and Colloredo-Mansfeld, Rudi

- 2014 “Risk-Seeking Peasants, Excessive Artisans: Speculation in the Northern Andes.” *Economic Anthropology*, vol.1, no.1, pp.124-138.

Arias, Eliézar

- 2005 “Agricultural Market Reforms and Potato Farmers’ Strategies in the Pueblo Llano Valley, Venezuelan Andes.” *Mountain Research and Development*, vol.25, no.4, pp.357-364.

Bebbington, Anthony, Denise Humphreys Bebbington, Jeffrey Bury, Jeannet Lingán, Juan Pablo Muñoz and Martin Scurrah

- 2008 “Mining and Social Movements: Struggles Over Livelihood and Rural Territorial Development in the Andes.” *World Development*, vol.36, no.12, pp.2888-2905.

Boelens, Rutgerd and Margreet Zwarteveen

- 2005 “Prices and Politics in Andean Water Reforms.” *Development and Change*, vol.36, no.4, pp.735-758.

Boelens, Rutgerd and Jeroen Vos

- 2012 “The Danger of Naturalizing Water Policy Concepts: Water Productivity and Efficiency Discourses from Field Irrigation to Virtual Water Trade.” *Agricultural Water Management*, vol.108, pp.16-26.

Boucher, François

- 2001 *Presentación del Proyecto de Investigación “Estudio del caso de los productos lácteos de Cajamarca con el enfoque de sistema agroalimentario local”*. Ponencia presentada en la Jornada Hemisférica de PRODAR y III Encuentro Nacional de Agroindustria Rural de Guatemala.

Boucher, François and Marie Guégan

- 2004 *Queserías Rurales en Cajamarca*. International Technology Development Group (ITDG).

Bradby, Barbara

- 1982 ‘Resistance to capitalism’ in the Peruvian Andes. In *Ecology and Exchange in the Andes (Cambridge studies in social anthropology; 41)*, Lehmann, David (ed.), pp.1-26, Cambridge: Cambridge University Press.

Deere, Carmen Diana

- 1990 *Household and Class Relations: Peasant and Landlords in Northern Peru*. University of California Press, Berkeley.

Eakin, Hallie

- 2005 “Institutional Change, Climate Risk, and Rural Vulnerability: Cases from Central Mexico.” *World Development*, vol.33, no.11, pp.1923-1938.

Espinosa, Cristina

- 2009 “Negotiating Landscapes, Survival, and Modernity: Goats, Migration, and Gender in the Arid Lands of Northern Peru.” *Culture and Agriculture*, vol.31, pp.39-48.

Feola, Giuseppe

- 2017 “Adaptive Institutions? Peasants Institutions and Natural Models Facing Climatic and Economic Changes in the Colombian Andes.” *Journal of Rural Studies*, vol.49, pp.117-127.

Franco, Efraín

- 1974 *Estudio de diagnóstico socio-económico del área de influencia del Proyecto Piloto Cajamarca—La Libertad*. Cajamarca, Ministerio de Agriculture—CRIAN(Centro Regional de Investigación Agropecuaria del Norte) Programa de Estudio Socio-Económicos. Proyecto Piloto Cajamarca-La Libertad.

古川勇気

- 2018 「取引関係の固定的から一回性への移行：ペルー北部山村のケシーリョ市場における売買を事例として」『地域政策研究』20-4、pp.39-58。

Gelles, Paul

- 2000 *Water and Power in Highland Peru. The Cultural Politics of Irrigation and Development*. London: Rutgers University Press.

Gudeman, Stephen and Alberto Rivera

- 1990 *Conversations in Colombia: the Domestic Economy in Life and Text*. Cambridge University Press, New York.

Harris, Olivia

- 1982 Labour and produce in an ethnic economy, Northern Potosí, Bolivia. In *Ecology and Exchange in the Andes (Cambridge studies in social anthropology; 41)*, Lehmann, David (ed.), pp.1-26, Cambridge: Cambridge University Press.

Instituto Nacional de Estadística e Informática (INEI)

- 1994 *Perú, resultados definitivos de las comunidades indígenas, Cajamarca*. vol.1, INEI, Lima.

Jenkins, Katy

- 2015 “Pachamama and the Mad Old Women: Unearthing Women’s Anti-mining Activism in the Andes.” *Antipode*, vol.47, no.2, pp.447-460.

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

- 2012 『貧困プロファイル ペルー共和国』 独立行政法人国際協力機構 (JICA)。

Mayer, Enrique

- 1974 *Reciprocity, Self-Sufficiency and Market Relations in a Contemporary Community in the Central Andes of Peru, Latin American Studies Program Dissertation Series vol.72*. Cornell University Press, New York.
2002 *The Articulated Peasants: Household Economies in the Andes*. Westview, Boulder, Colo.

Mayer, Enrique and Glave, Manuel

- 1999 “Alguito para Ganar (a Little Something to Earn): Profits and Losses in Peasant Economies.” *American Ethnologist*, vol.26, no.2, pp.344-369.

Mitchell, William P.

- 1991 *Peasants on the edge : crop, cult, and crisis in the Andes*. University of Texas Press, Austin.

Orlove, Benjamin S.

- 1977 *Alpacas, sheep, and men : the wool export economy and regional society of southern Peru*. Academic

- Press, New York.
- Peisa S. A. C.(eds.)
 2004 *Atlas Regional del Perú vol.13*. Peisa S. A. C., Lima.
- Platt, Tristan
 1982 The role of the Andean ayllu in the reproduction of the petty commodity regime in Northern Potosí (Bolivia). In *Ecology and Exchange in the Andes (Cambridge studies in social anthropology; 41)*, Lehmann, David (ed.), pp.27-69, Cambridge: Cambridge University Press.
- Roseberry, William
 1989 “Peasants and the World.” In *Economic Anthropology*, Stuart Plattner (ed.), pp.108-126, Stanford University Press, Stanford.
- 塩沢 由典
 1997a 『複雑さの帰結 複雑系経済学試論』 NTT 出版。
 1997b 『複雑系経済学入門』 生産性出版。
- Stensrud, Astrid B.
 2016 “Climate Change, Water Practices and Relational Worlds in the Andes.” *Ethnos*, vol.81, no.1, pp.75-98.
- 友枝啓泰
 1986 『雄牛とコンドル』 岩波書店。
- 鳥塚あゆち
 2009 「開かれゆくアンデス牧民社会：ペルー南部高地ワイリャワイリャ村を事例として」『文化人類学』 72-1、pp.1-25。
- Velásquez, Mauricio
 2017 “Peasant Differentiation and Service Provision in Colombia.” *Journal of Agrarian and Change*, vol.17, pp.779-788.
- Vera Delgado, Juana and Margreet Zwarteveen
 2008 “Modernity, Exclusion and Resistance: Water and Indigenous Struggles in Peru.” *Development*, vol.51, pp.114-120.
- Walsh-Dilley, Marygold
 2013 “Negotiating hybridity in highland Bolivia: indigenous moral economy and the expanding market for quinoa.” *The Journal of Peasant Studies*, vol.40, no.4, pp.659-682.
- Wolf, Eric R.
 1957 “The Closed Corporate Peasant Communities in Mesoamerica and Central Java.” *Southwestern Journal of Anthropology*, vol.13, no.1, pp.1-18.

(2019 年 1 月 9 日採択決定)